授業探訪

総合系科目・多彩な学び（コラボレーション科目）

母語である日本語を見つめ直し外国語を相対的に捉える「多言語・多文化理解を促す日本語」

科目コーディネーターおよび全回担当者／外国語教育研究センター教授　三浦 愛香
限定回担当者／日本語教育センター兼任講師　高嶋 幸太、
外国語教育研究センター准教授　町 沙恵子、
外国語教育研究センター准教授　牛山 さおり

はじめに

私たちは、これまで日本の様々な高等教育機関において外国語教育（英語･ドイツ語･日本語教育）にそれぞれ携わってきました。そのうち三浦・町・牛山は、本学外国語教育研究センター（以下 FLER）の専任教員として、複言語・複文化主義に基づき、全学共通科目の言語系科目の運営を担い、履修者が学習言語におけるコミュニケーションを円滑に実現できるよう、外国語教育の現場に日々立っています。一方で、自らも外国語学習者として、日本以外の出自の話者との異文化間コミュニケーションの場で、自分が意図したことがうまく伝わらなかったり、対話を円滑に進めることの難しさに遭遇したりし、その要因は、単に外国語の知識や発話能力ではなく、相手とのコミュニケーションスタイルの違いにあることを痛感してきました。また、特定のスキルや目的に特化した外国語の授業では、学習者の母語である日本語の特徴を体系的に認識し、外国語を相対的に捉えていく機会を提供することが難しいのが現状です。そこで、日本語がどのようなコミュニケーションスタイルを持ち、その背景にはどのような思考や文化があるのか日本語にて授業を展開したいと考えるようになりました。そして、本学日本語教育センターで兼任講師として日本語教育に携わる高嶋先生にご協力を仰ぎ､全学共通科目｢多彩な学び｣における企画提案型科目の「コラボレーション科目」に応募し、2024 年度秋学期に「多言語・多文化理解を促す日本語」を開講しました。本授業では、ゲストスピーカーの明治大学の岩田祐子特任教授のほか、FLER の金恩愛教授（朝鮮語）および種市瑛教育講師（英語）にも一部ご登壇いただきました。また、企画の段階では、坂本真一准教授（ドイツ語）にもご協力いただきました。関わってくださった方々に重ねて感謝申し上げます。

本科目の特徴

本科目では、毎回の授業でグループ討論を実施し、各プロジェクトでは履修者自身が

率先して言語分析に携わり発表するだけでなく、他の履修者と意見交換する機会を設けることで、履修者が主体的に授業に参加することを前提にしました。履修者 48 名のうち 47 名がほぼ全授業に出席し、各回の課題に熱心に取り組みました。

本科目は、主に以下の 6 つのパートから構成されています。

(1) オリエンテーション、(2) 基礎編：言語を司る思考や発想・言語形式と対人関係・談話構造・非言語コミュニケーション、(3) 応用編：ディスコース分析、(4) 応用編：言語とアイデンティティ、(5) 明治大学の岩田特任教授によるゲスト講演：ライティングに見られる日本語、英語、フランス語における論理的思考の相違（名古屋大学の渡邊雅子教授による、各国に見られる思考表現スタイルの違いを文化、歴史、教育、社会的背景の観点から論じた著書を基にしたワークショップを含む講演）、(6) 授業で扱ったトピックを基にしたグループ・プロジェクトの発表

いずれの授業においても、担当者は、言語学とその周辺分野で扱われる理論や先行研究を基にするだけでなく、身近に存在する多様なメディア（アニメ、漫画、映画、テレビの対話番組、小説、新聞記事など）から得られる生きた言語データを扱い、履修者に各回のテーマや概念を自分事として捉えてもらう機会を多く与えました。また、英語に限らず、朝鮮語、ドイツ語、フランス語の視点も多角的に触れて、日本語によるコミュニケーションを捉えています。そして、ミニ・プロジェクトやグループ・プロジェクトを通して、履修者が自ら率先して課題を見つけ、それについて調査や分析を行うことで、理解を深めてもらいました。次節以降で、各担当者が授業の詳細を報告いたします。

基礎編：言語を司る思考や発想・言語形式と対人関係・談話構造・非言語コミュニケーション　（担当：高嶋 幸太、三浦 愛香）

第 2 週から第 6 週の授業は、日本語がどのようなコミュニケーションスタイルを持ち、その背景にはどのような思考や文化があるのかを扱う基礎編として設定しました。オリエンテーションで紹介したホールの「低文脈文化と高文脈文化」に加え、日本語における話者同士の社会的関係を示す「ウチとソト」や場に依存する「わきまえ」といった日本人研究者らによる概念を紹介しています。また、外国語である英語や朝鮮語との相違点にも触れ、日本語の体系やコミュニケーションスタイルを相対的に捉えて、実際の言語使用を考察してもらうことを狙いとしました。

第 2 週では、初対面における会話の自己開示の度合いを取り上げて、話者同士の社会的関係が会話スタイルに与える影響を日英語で比較をしたり、「ヤル／モラウ／クレル」などの授受表現、「行く」「来る」のような移動動詞、日本語の敬語体系について、「虫の視点と神の視点」や「森林の思考・砂漠の思考」（前者が日本語、後者が英語）といった例えを用い、話し手のスタンスが日本語と英語ではどう異なるのかを捉えていきました。特に、日本語では、場のコンテクストで明白なことは明示せず、主語や目的語が頻繁に省略される一方、英語ではそれらを省略できない構造になっていることから、日本

人が聞き手として巧みに行間を読み、話者の意図を理解することに驚きや関心を新たにした履修者も少なくありませんでした。

第３週は、日本語の文法と対人関係について取り上げ、日本語の呼称・人称、そしてスタイル（普通体と丁寧体）や待遇表現・敬語表現を解説し、普段相手や場面に応じてどのように言葉を使い分けているかを内省してもらっています。また、「ウチとソト」の人間関係や、場に応じた「わきまえ」、それに基づく日本人の言語行動などを取り上げ、依頼に見られる敬語表現を日英語で比較しました。

第４週では、日本語学習者向けに作られたビデオ教材を視聴し、あいづちやうなずき、ジェスチャーや姿勢等の非言語動作や対話における間や言い淀み等、日英語におけるコミュニケーションの違いを観察してもらいました。また、種市先生から、日本語における沈黙の効果や、日本人の沈黙に対する肯定的な姿勢についてお話しいただきました。

第５週では、日本人の思考を示す特徴的な言語表現やスタイル（主語の後に続く助詞「は」と「が」を入れ替えると主題がどう変わってくるか、起承転結の修辞構造、世代差による言葉遣い、役割語やフィクションで用いられるキャラクター語等）を扱い、これらを通して日本語で体験する世界と同じ世界を他言語で表現できるかについて考察しました。また、金先生には、日本語に近いとされる朝鮮語が具体性の高い動詞志向であるのに対し、日本語は曖昧性の高い名詞志向にあることについてもお話しいただきました。

第６週では、東映アニメーションミュージアムチャンネルのサイトを用い、履修者は自身が選んだアニメキャラクターの発話に着目し、そこで用いられる敬語、呼称、終助詞、役割語、非言語動作、話者間の社会的距離等を分析し、それをクラスメートに共有するというミニ・プロジェクトに取り組み、それまでの授業で扱った日本語のコミュニケーションスタイルの内容の理解をさらに深める機会となりました。

応用編：ディスコース分析　（担当：町 沙恵子）

私が担当した第７週から第９週の３回の授業では、日本語会話のディスコース（談話）分析を行いました。６週目までの基礎編の授業で学習した基礎的知識を踏まえて、実際の日本語（そして一部比較のために英語）の会話を量的・質的観点から分析し、日本語会話の特徴を理解することを目的としました。

第７週では、まず言語研究におけるディスコース分析の位置づけ、研究手法、どのような研究があるのか、そして発話データの書き起こし（トランスクリプト）の解読方法などを解説し、その後、実際に日本語および英語会話の映像データとトランスクリプトを比較する作業を行いました。大多数の履修者が会話のトランスクリプトを初めて目にし、耳で聞く会話とはかなり異なった、ことばが雑多に発されているような印象を受けたようで、「驚いた」、「新鮮だった」という感想が多く見られました。

第８週と第９週は履修者がペアとなり、会話の映像データとトランスクリプトを用い

て興味のある言語資源・現象を分析するミニプロジェクトを行いました。会話内で生じるあいづち、発話の重複や繰り返し、トピックの移り変わり、話者交代、などの分析対象をペアごとに選択し、その現象をそれぞれの視点で分析し、パートナーと分析結果を共有しディスカッションをしながら進めるという方法で行いました。

第 7 ～ 9 週のディスコース分析の様子

プロジェクトのまとめレポートでは、履修者が各々の分析、解釈、発見、そしてそれをもとに日本語会話の特徴を説明しました。様々な報告がありましたが、多くが「日本語は会話参与者たちが協調的に会話を盛り上げ、展開させていく傾向がある」といった特徴を挙げていました。プロジェクトの感想では、「ペアで分析を行うことで、同じ現象についても自分とは異なる解釈が出て、より視野が広がった」といったコメントが多数あり、ペアでプロジェクトに取り組むことの意義を実感しました。履修者一人一人がデータと向き合い、分析を通して深く考え、自分で結論を出す、といった主体的な活動となり、それを純粋に楽しんでくれたようで、私にとっても大変やりがいのある授業となりました。

応用編：言語とアイデンティティ　（担当：牛山 さおり）

私が担当した第 10 週、第 11 週の授業では、ドイツ語とドイツ語圏の言語政策を紹介し、言語とアイデンティティについて履修者に考えてもらうことを目的としました。

第 10 週にはドイツ語の基本的なしくみ、とりわけ日本語・英語と比較が可能な人称代名詞の使い方、オノマトペ、コミュニケーションスタイルの特徴を扱いました。そしてドイツにおける言語政策の変遷、ウクライナ避難民のためのドイツ語教育、スイスの小学校での言語教育事情などを紹介することで、ヨーロッパの複言語・複文化主義に触れることができました。さらに言語とアイデンティティというテーマを考えるにあたっては、少数言語のひとつであるソルブ語、ドイツ語の変種とも言われるイディッシュ語を取り上げることで、少数民族が言語と独自の風習、伝統文化を維持・継承することの意義を考えました。上記のテーマについてグループで話し、履修者が自らの言語使用を振り返る時間を設けたところ、「日本で育って当たり前だと思っていたことを見直すことができた」というコメントも見られました。同時に、履修者からは少数言語、消滅危機言語への興味・関心の高さが示されました。

第 11 週は、第 10 週の内容をベースにしながら、複数の言語を学ぶことによって、情報を得るチャンネルが増えることの重要さについても触れました。そしてこの 2 回の授業を通して「日本における多言語・多文化について調べる」というミニ・プロジェクトを実施しました。池袋エリアの多言語使用状況、豊島区あるいは自身が居住する市区町村の役所などで実施されている言語政策、国内に存在する英語以外のコミュニティについて調べる履修者が多かったです。

この授業を通して、履修者自身が自分の母語とこれまでに身に付けた言語を振り返ると共に、日本国内の多言語・多文化事情について知ることで、どのように他者を受け入れ、共存をはかるかということを考えるきっかけになったのであれば幸いです。

学びの集大成

グループ・プロジェクトは、3 名ないしは 4 名のグループから成る 12 グループに分かれ、第 9 週から準備を開始しました。Ａ０サイズのポスターをパワーポイントで作成してもらい、第 13 週には、教室のプロジェクターを用いて調査の概要を各グループ 5 分で紹介する時間を持ちました。最終週の第 14 週には、1 時間のポスター発表セッションを実施し、履修者全員が発表だけでなく、前週に特に関心をもったグループの発表を視聴し、発表者との意見交換をする機会を持ちました。各グループは、多様なメディアから得られた映像データ（日本のアニメやドラマ、ディズニー映画、テレビのトーク番組、コンビ芸人によるラジオ番組等）や自ら収集した言語データ（友人の会話やインタビュー、店の貼り紙に書かれた注意書き等）を題材とし、日本語の時代変遷、話者の関係性の変化に応じたコミュニケーションスタイル、日本語と他言語への翻訳の差異、世代が異なる話者同士の会話、複数言語や方言の使用が話者のアイデンティティの形成にもたらす影響、使用言語によって異なる話者の視点等をテーマとし、前述の基礎編と応用編の授業で扱ったトピックを包括的に捉えた学びの集大成の場となりました。

第 14 週のポスター発表の様子

最後に

私たちは、履修者に多様なコミュニケーションスタイルに精通し主体的に行動できる自立した外国語学習者エージェンシーを確立してほしいという大きな狙いを持って、本科目を立案しました。履修者からのフィードバックでは、日本語のユニークさや美しさ、相手に応じて言葉を選び謙虚なコミュニケーションスタイルを好む日本人としてのアイデンティティ、一方で、日本語のスタイルがグローバル社会においてもたらすデメリットを認識する必要性、他言語話者への理解と配慮、異文化間コミュニケーションで生じる障壁への対処、日英語以外の外国語学習や少数言語への関心などについて述べられ、私たちの想定以上の大きな学びとなったようです。また、私ども教員も、新しい視点や思ってもみない知見を履修者から得ることも多く、励みとなると同時に多くの学びを得ることができました。

なお、履修者の多くは首都圏出身者のようですが、上京して初めて自分が方言を話すことをアイデンティティとして自認したという学生、複数言語を母語とする学生、日本語を第二言語として一から学んだ日本人学生、日本語を外国語として駆使する留学生もおり、多様性に満ちた学修環境でした。立教セカンドステージ大学をはじめ異なる所属学部や学年だけでなく、多様な言語や文化のバックグラウンドを持つ履修者がお互いの経験や考えを共有できる機会が多くありました。本授業を通し、立教大学が掲げるリベラルアーツ教育の実現に微力ながらも貢献することができましたらこの上ない喜びです。

みうら　あいか
たかしま　こうた
まち　さえこ
うしやま　さおり